



出演：宮本信子／山崎努／津川雅彦／志水季里子・松居一代・マッハ文朱／大滝秀治
室田日出男／大地康雄・麻生肇・桜金造／橋爪功・絵沢萌子・佐藤B作・高橋長英
伊東四朗／小澤栄太郎・嵯峨善兵・田中明夫／芦田伸介／小林桂樹／岡田茉莉子

監修＝磯邊律男(元国税庁長官)／木場康治(バンガード編集主幹)／福田幸弘(元国税庁長官)



伊丹十三監督作品

製作＝玉置泰・細越省吾／撮影＝前田米造／照明＝桂昭夫／録音＝小野寺修／美術＝中村州志／編集＝鈴木暁／音楽＝本多俊之／音楽プロデューサー＝立川直樹／キャスティング＝笹岡幸三郎／グラフィック・デザイン＝佐村憲一／助監督＝白山一城／製作担当＝川崎隆／家具コーディネート＝アビス株式会社 協力＝富士通西友／HONDA／コクヨ／GALAMOND／三陽商会 オリジナル・サウンドトラック 東芝EMI 



マルサの女

脱税摘発の超プロフェッショナル、日本のタックス・ポリス、国税局査察部——人呼んで彼らをマルサという。

途方もない映画が誕生した。全く新しい形式の犯罪映画「マルサの女」である。マルサとは、日本のタックス・ポリス、国税局査察部のことだ。脱税者たちが死神よりも恐れる、脱税摘発の超プロフェッショナル集団、国税局査察部。マルサとは彼らを指す隠語なのだ。

映画は一人の女性査察官、板倉亮子の行動を追って展開する。亮子の活躍にともなう、マルサたちの調査活動——内偵、尾行、張り込み、反面調査、ガサ入れなど、脱税摘発のテクニクが克明に描かれ、それに従って現代日本の欲望の断面図が脱税の手口とともにまなましく浮かび上がってくるという寸法だ。

脚本監督は「お葬式」や「タンポポ」で大ヒットをとばし、話題を独占した伊丹十三。伊丹は友人のパチンコ店主から査察に入られた時の体験談を聞き、即座に「とる立場」からの映画を思いついたという。とる立場からの映画にすれば、とられる側としてさまざまな業種を登場させることができるし、しかも彼らのそれぞれが、やっと隠しおかせた何億という虎の子を持てられるわけだから修羅場の連続で映画を作ることができる。「これはいけるぞー」と考えた伊丹は、直ちに猛烈な



取材を開始した。国税局査察部の査察官や税務署の調査官はもとより、税理士、公認会計士、さまざまな会社の経営者、銀行関係者、パチンコ店、ラブホテルのオーナーから、果ては悪徳不動産業者や経済ヤクザにまで伊丹の取材は及んだ。

「なにしろ脱税する者と、それを暴く者との知能の限りを尽した映画ですからね。取材しないことにはセリフ一行も書けない。たとえば税務署の調査官が銀行へ調査に行ったらどんなやりとりになるのか、これ、想像では書けないでしょ？ この映画を僕は、一種のハードボイルドの探偵モノとして、とことんリアルに作ろうと思ったんです」

意外なことに国税庁、国税局が大変理解を示してくれた。

「国税庁長官の梅沢節男さん、元長官の磯邊律男さん初め、庁や局の多くの皆さんが我が事のように力を入れて下さり、取材の便を計って下さった。この映画に使われた材料の類を見ぬ面白さは、ひとえに彼らの協力によるものです」

取材された膨大な材料の「九割以上を泣く泣く捨てて」書き上げられた脚本は、当然のことながら驚くべき情報量の濃いものとしてでき上がった。

たとえば脱税摘発では隠された現金、通帳、印鑑、借金庫の鍵、メモなどが重要な役割を果たすが、この映画の中でも隠し場所として、金庫や机の引き出しはもとより、女のパンテイの中、縁の下、ピアノの水槽、ブロック塀のブロックの穴の中、人形のたもと、ブラジャーのパットの中、そばがらの枕の中、登校する小学生のランドセル等と多彩である。ガサ入れの際とつさにメモを食べてしまう女も出現する。査察官たちが口を開けようとするが女も懸命に頑張る。査察官の一人が女の鼻をつまむ。女、たまらず口を開け、査察官すかさずメモを取り出す、などというくだりもあるらしい。

キャストも伊丹映画の例によって豪華だ。脱税を摘発する側として、宮本信子、津川雅彦、大滝秀治、マツハ文朱、小林桂樹。脱税側として山崎努、岡田茉莉子、志水季里子、松居一代、伊藤四朗、室田日出男、芦田伸介。なにやらすてにして胸騒ぎのするような顔触れだ。

主人公板倉亮子には宮本信子。「目つきが鋭く、すけすけと物を言い、男の経営者を相手に一歩も引けをとらぬ反面、意外な女っぽさや可愛気のある女、というのが監督の注文です。外見的にはオカッパでチビでブスでソバカスだらけと聞き、びっくりすると同時に猛然と楽しくなってきました」

一方巨億の脱税者権藤英樹の山崎努。「金銭欲のかたまりで女好きという、現実の自分と大変距離のある役なので、監督におまかせという感じね」ととぼけながら、小道具から衣裳、物言いから身のこなしまで凝りに凝った役作りで、働きざかりの中年男の色と欲をノリで演じている。

さて、こうして製作に入った「マルサの女」公開前から早くも轟々たる反響を呼んでいる

が、ラッシュ段階の試写を見てもらっての感想を聞いてみよう。

「これはしかしホントですか？ マルサの人たちってホントにこんな凄いことやってるの？ もしかしたらこの人たちが日本で一番強いんじゃない？」（テレビディレクター）「チビでブスの板倉亮子がかんたん好きになっちゃったのよね。試写室を出たあと私も肩をいからせて歩いてちゃったわ」（OL）「いやあ、人事ではないね。狙われる権藤の気持ち痛いほどわかった」（パチンコ店経営）「脱税はペイしないということがわかってもらえたと思う」（税務署員）「そのへんの喫茶店とかお店屋さん結構せこく脱税してるのがわかって笑っちゃいましたね」（自由業）「脱税ってまずお金を儲けなきゃできないんだな、と思った」（小学生）「宮本信子さんの主演女優賞間違いありません！」（主婦）

そして、とどめの一言。「いつしか、もと取れ！ もっと取れ！ と心の中で叫んでいる自分に気づいて恥ずかしくなった」（サラリーマン）

ともあれ「マルサの女」は62年2月、納税のためごったがえす日本で東宝系大公開！

